

# 自作黒歴史集

yosilove

## [二次][SUFFLE] 神と悪魔の狂想曲

---

会議は白熱していた

3つの世界を巻き込む非常に大きな問題を解決するために、この会議は開催されていた。

そう・・・三日三晩に渡って

出席者はみな疲れ果てていた、全員目の下に隈を作り、あたかもパンダ専門の動物園のような風情だ。

しかし彼らは瞳だけは爛々と輝かせ、その語気を弱めることもなく、自らの意見を押し通そうとしていた。

極限の疲労によって次第に数を減らしてゆく発言者たち、しかし誰一人として譲歩することもなく、自らの意見が唯一無二の正解だと信じて怒号を上げ続ける。

「なぜだ・・・なぜこんなことに？」

きっかけは些細なことだった、冗談半分で言った一言にあいつが食いついてきて・・・

こんなはずではなかった、軽い談笑で済ますつもりだったのだ。

まさかこんな大事になるとは思ってもみなかった。

魔王は難しい顔をしたまま、焦りに焦っていた。

こんなことをしている場合ではない、早くアレを、アレを届けなければならないのに。和服を着て頭を抱え込んでいる彼よりも先に・・・

「むううう」

神王は頭を抱えていた

ちょっとしたイベントのつもりだった、だからあいつの思いつきにのり、手はずを整えた。

こんな騒ぎになるとは神ですら予測しえなかつただろう・・・

なんとかしなければ、今日中に例の物を届けなければ、難しい顔で押し黙っているあいつよりも早く・・・

思い悩む二人をよそに、会議はますます白熱してゆく

時間は刻々と過ぎてゆく

初老の人族の男が顔を真っ赤にして熱弁をふるっている

いわく・・・

「つまり！女性に一番似合うのは着物姿である！」

2人は同時に両手を机に叩きつけた

そしてまったく同時に声を上げた

「ばかやろう！ 何を着ても似合うに決まってる！！」

「なにをいう！ 何を着ても似合うにきまってる！！」

啞然とする会議場を飛び出し、2人は競い合うように走っていた

「くっ なんて「女の子にはどんな服が似合うか」なんて会議開いてしまったんだろう」

「ちい たまには他人の意見も取り入れた服を着せて、婿殿の視線を独り占めさせてやりたかったのに」

「ふう～ あまいな神ちゃんは、今日のパーティーの主役はこの黒のドレスを着たわが愛娘に決まってるじゃないか」

「い～や 婿殿はこっちの白い天使の仮装の方を気に入るに違いない！」

「ところでなぜそんなにいそいでるんだい？パーティーが始まるまでまだ時間はあるだろう？」

「そっちこそ、なんで走ってるんだ？らしくないぞ？」

かくして、神族と魔族、双方の王はほぼ同時に自宅近くに降り立った

隣家で開かれる「仮装パーティー」で、1秒でも長く娘に花を持たせるために

2人を待っていたのは黒山の人だけだった

カメラやマイクをもった人ばかりは、玄関前で困り果てた顔をする少女たちを取り囲み、口々に質問をしている。

「それで？ 結局着物を着るんですか？」

「それともチマチョゴリ？もしかしてタキシードですか？」

そんな声も耳に届かず

2人は一心不乱に人の群れをかき分ける

「うおお～～ どけどけどけ～～～」

「ただいま～ パーティーはもう始まっちゃったかい？」

神王の愛娘は、いかにも怒っているという感じで顔を背けた

魔王の愛娘は、あわてふためいてた表情を一瞬で消し去った

2人の少女は声をそろえてこういった

「おかえりなさい、神王さま」

「おかえりなさいませ、魔王さま」

3つの世界から30人のブレインを動員し、23人を過労で倒れさせた会議の成果は・・・

「他人の振り1週間の刑」だった

## 純白ノ死神

---

「今日の俺はツキまくりだぜ！」

金髪のセールスマンは薄汚れたビルの中を一人歩いていた

「まさか「銀髪の少女」がたった2時間で見つかるとはな、あのクソ野郎が！なァ～にが「昇進のチャンスだ、まあせいぜい頑張れ」だ、ざまあ見やがれ！！」

暗い廊下に響く靴音、少女が寄り添ってきた時の顔が思い浮かぶ

「まさにビデオに出演するために生まれてきた様なガキだったな、爪を剥がされる瞬間の顔が思い浮かぶぜっ あれなら変態野郎共も大喜びだ クククッ」

殺人を見て何が面白いのかはわからない、ただ高く売れさえすればそれでいい……裏社会の住人として至極真っ当な思考回路を持つ男は上機嫌だった

「お～い ピート、ジャック、アレックス、マイク！ いい画は撮れたか～？ ちゃんと顔は残しただろうな？」

錆び付いた扉を開く、「駅への近道」ならぬ「天国への扉」だ

耳に届いたのは扉の軋む音

目に映ったものは壁や天井を飾る弾痕、散りばめられた元は人間だった物、そして……

真っ白な寝室に立つ、真っ赤なコートを着た殺意

金色の瞳を持った一なにかとてつもなく恐ろしいもの一は少女の声で話しかけてきた

「あら、おかえりなさい」

「……………」

「さっきは道案内ありがとう、おかげさまでお気に入りの洋服がボロボロよ」

(……………は？)

「ああ、でもあのアイスクリームはとてもおいしかったわ だからお礼に……」

(なんだ？ さっきのガキ？ 双子……だったのか？)

近づいてくる死、伸びてくる右手

(いや そんなことはどうでもいい！ とにかく逃げっ！！)

ゆっくりと首に添えられた 柔らかい手、満面の笑み

「――っ！！！」

「殺してあげるっ」

圧倒的な腕力、小気味のいい音———暗転.....